

藤原審爾

遺言集

新潮社版

遺言集

藤原審爾

新潮社版

ふじ かわ しん じ
藤 原 審 爾

大正10年(1921)、東京生まれ。幼くして
双親を失い、父の郷里岡山で祖母に育て
られる。青山学院高商部を病氣中退。名
作『秋津温泉』で戦後いち早くデビュー、
その後、風俗小説、時代小説、動物小説、
社会小説など多彩な分野に創作範囲を広
げる。昭和27年『罪な女』で直木賞を受
賞。代表作に『さきに愛ありて』『赤い殺
意』他があり、近年は『死にたがる子』
『落ちこぼれ家庭』『結婚の資格』『まだ愛
を知らない』等、人間の教育をテーマに
した一連の作品が高い評価を得た。昭和
59年(1984)12月20日、肝臓癌により死
去。

遺す言葉

定価一四〇〇円

昭和六十年十二月五日発行
昭和六十一年八月二十五日五刷

著 者 藤 原 審 爾
発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社新潮社



東京都新宿区矢来町七十一番地
電話 東京(266)五一二(業務)
東京(266)五四二(編集)
振替 東京 四一八〇八 一六二
印刷 東洋印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

© Shizue Fujiwara Printed in Japan. 1985

ISBN4-10-319010-8 C0095

藤原春爾
遺言集
目次

(8)	乱説について……………	三
(7)	ふたたび場について……………	四
(6)	人の場について……………	四
(5)	ふたたび奉仕について……………	三
(4)	奉仕について……………	六
(3)	育心について……………	九
(2)	ものを見る場……………	三
(1)	はじめの言葉……………	七

(16)	国民的期待について……………	一〇八
(15)	知恵について……………	一〇〇
(14)	生きるすべについて……………	九
(13)	稽古事について……………	六
(12)	創りかたについて……………	九
(11)	創ることについて……………	七
(10)	恩恵について……………	六
(9)	見ることに……………	六

(17)	人の掟について……………	一三
(18)	棄権について……………	一九
(19)	食について……………	二六
(20)	住について……………	三三
(21)	衣について……………	四〇
(22)	孝について……………	四七
(23)	ふたたび孝について……………	五四
(24)	恩について……………	六一

(25)	信心などについて……………	一六
(26)	友について……………	二五
(27)	結婚について……………	二八
(28)	生について……………	三八
(29)	死について……………	四五

遺
す
言
葉

(1) はじめの言葉

わたしはおさない頃に、双親をうしない、祖母に育てられた。祖母は地主のありふれた娘で、格別字識のある女ではなかったが、なかなか人としての道についてきびしく、少年のわたしが独りたのしむことを許さず、たとえば遊び道具なども、近所の子達と一緒につかう野球道具のようなものであれば、すぐに買い与えてくれたが、独りでこつこつ作る模様のようなのは、買ってもらえなかった。これは、多分、うけつがれてきた地主としての心得にもとづくものと、双親のないわたしを内向的に育てたくなかったためだろうが、いまではそういう育てかたに、祖母を超えた世の知恵を感じないではいられない。

あるときわたしは、裏山で野苺のいちごのみごとな群れをみつけ、それを摘み、竹籠に入れて戻り、独りでたべていたところを、祖母にみつき、つよくとがめられたことがある。皆にわけて一緒にたべなさいというのである。わたしは山でそれをみつけ、独りで摘んで戻ったのであるから、その努力にたいして応分の配慮があつて然るべきだという思いを拭いが

たく、いささか不満であつた。

その不満に答えて、祖母は、山の幸は万民のものだと説き、一人はうまからずということばを、人としての心の持ちかたを、わたしに教えた。その折また祖母は、一人はうまからずということばのことを、「これは、世に遺つた言葉ですよ」と言つた。

ことばにもそのつかいようにも、この世に生きた人々の願望理想がこもつており、そういうふくらみへの感応が、時に人にペンをとらせるといふようなことをさせる場合もあるのではないだろうか。強いて申さば、いまのわたし、その一人である。

*

わたし、病弱で、二十歳すぎからの三十年のうち、その半ばを病床ですごしている。ひとくちに十五年の就床生活というのはやすいが、それは悩みと歎きの長い一日一日であつて、人のなん倍もの苦しみをなめてきたのだが、いまもまた糖尿病、肝硬変、心臓病、腎臓病などをかかえて、難儀をしているけれども、これという悟りを得られもせず、さしたる思いにも恵まれぬ。凡愚を歎くにも疲れたが、そういう暮しの中で、それなり心得も生れてくる。思いや気分^いに執着せず^いにいられるようになったのも、その一つと謂つてよい。

よく人は考えることに執着し、そのことによつてより人間になり得るとするが、あれはどうであらうか。たしかに思考する人のありさまは、獣などとちがひ、人間風ではあるけ

れども、それは能く人間の一部の機能を育てたありきまであつて、人をその真価において表現しているとは思われない。人智などといつてみたところで、もともとそれは自然や社会の一部であつて、いかにそれらはたらきを集散的に反映することが出来るとしても、獸や虫などのそれと、質的におなじものといふべきなのである。もとより獸などより格段に発達していはするが、それにしてもたかだか存在についての認識能力があるという程度のものであつて、その能力にしても人間のものと思うよりも、自然の摂理をよりよく守るための、自然そのものの大きな機能と思つたほうが、よほど妥当なのではないだろうか。

すべからく人智というものは、天理をきわめるとか、人間の生そのものをあきらかにするはたらきを、本来備えているものではなくて、ただ生きぬくための能力であることを、自覚すべきなのであつて、その自覚がなくては、人智をまともにあつかうことが出来ず、部分のいびつな肥大をゆるし、容易に人智の恩恵にあずかれぬということになるようである。

多分、仏教での見性という段階が、そういう自覚を得たあたりであつて、仏教ではさらにその悟りを深めることに、人間本来の能動性を閉じこめ、一つの円環的絶対の生の世界をつくりあげていく。わたしには、このあくなく能動的な人間の本性、人間であることさえも超えようとする能動性の統御が、なによりも適確に一つの生とその世界を築くものであり、仏教はけだし賢明にその方法を示してくれているように思われるが、しかし凡俗の徒には、そうした間断なきたたかい、かぎりなき修行など、やすやすとつづけられるもの

ではない。その能動的な本性がおもむくところに、なるべく遅れてしたがいつつ、往生しようと思うくらいのものである。この遅れてしたがうところが、わたしの会得なのだが、ここから得られるものは、安穩ではなくて、安逸に耽^{たふ}けるといふことなのだろう。年をとり、年ごとに知識もふえ、病苦にしても多様に欺いて拡散させるすべを知るようになったが、そうした生きかたは所詮あさはかなものであつて、年と俱^{とも}に深まる人の辛苦をいづれはさばきかねるようになるのである。

もともと人の生というものは、獣や虫と等しく、現在に閉ざされているものなのである。昨日いくらたくさんたべたからといつても、今日たべることが出来なければ、いかんともしがたい存在なのである。このことは、人の一生が、最後の死をむかえる時期に、最高の重点をおいて生きなければならぬことを教えている。いかに倅^{しあ}せな生活を過去におくつたところで、最終の時期に倅せでなければ、とるに足りぬことになるのである。むしろ人の能動性は、そういうことを超えようと、あれこれつとめてきている。観念の世界をことさらにはぐくんで、名誉、名声、地位をはじめさまざまな栄光をこの世につくり、それによつて現在を超えようとする。そういうありさまをみているというと、人に備わっている能動性は、ほかならぬ生のはげしい衝動であつて、それを野放しにしておくことは、あたかも死にいきよしているようである。しかし最終の時期をよりよくすごそうとするためのそうした突進を、ただあさはかというわけにもいかない。そういう突進は、野放しのもので

あり、自転車操業のような悪しきところがあるけれども、にもかかわらずたとえば蟬がひねもす鳴いて鳴き死ぬような、自然の好みのすがたが感じられるのである。いうなればありふれた生のすがたなのであり、おおむね人はそのように生きて死ぬのかもしれない。この世は金さえあればひとまず倅せに生きられると思ひこむことで、ひたすら金を求める者も少くないが、ひたすらつとめることで、手軽く往生する場合も、よくみかけるところであつて、欲に走ることもいちがいに戒めかねるよう思われるがどうだろう。

わたし、五十半ばであつて、さきざきどのようなことがおこるものか、知るよしもないが、人は年々歳々育つものであり、育つにつれて、よく見えよくわかり、たとえば悔みなどにしても、年ごとに深まってくるのである。若い頃さして気にもとめなかつた罪など、年ごとその罪のほどがわかり、悔みは深まり大きくなつて行く。このまま生きつづけていれば、むかしの罪への悔みの重さに耐えかね、ほけてしまわねば生きかねるのではなからうかと想われるほどである。

それは、五十余年も生きれば、この世のおおかたのことはわかり、苦や悔みをしのぐ手だてなども老練になりはするが、いかんせん困つたことには、年々、年相応の新たな辛苦がおとずれてくるのであつて、しかも年相応に深く感応するゆえ、ひとしお心身のいたみは痛烈である。時に、生きながらの地獄が、行手に待ちかまえて、この身をのまんとしている心地がするほどである。

かくて、いまにして思えば、この世に遺つたさまざまな論^{きと}しのことばや、いましめことわざはじめの知恵は、この最終の時期をしのぐためのものであつたのかと、おのれのあさはかさにあきれなければならない。おそらくむかしのましな人々は、人の能動性をたくみにつかい、一つの世界を構築し、その城に拠つて、この最終の時期をしのぐとしたのだろう。

そういう生きかたは、たえざる果しない努力が必要なのであつて、凡俗の徒の能くなし得るところではないが、この構築については、なにびとも考えてみるのがのぞましいのではあるまいか。これは、いかに生きるべきかというようなことではなくて、一世をすごす棲家にめぐまれようとすることであり、他力本願的であるけれども、この世に遺つたことば、知恵がさし示しているところは、その手輕な構築にあるごとく、わたし、思えるのである。

(2) ものを見る場

かれこれ二十年も前のことだが、広津和郎さんと一緒に、五六人で松川事件の現場を見に出かけ、飯坂に泊った。

わたしら若い者は、夕飯のときから酒になり、夜更けまであれこれかしましく文学論をやり、あくる朝、はやめに目が覚め、その広間へ出かけて、新聞を縁の椅子で読んでいると、すぐ隣の部屋から襖をあけて、広津さんが起きてきた。広津さんは、

「昨夜はにぎやかだったね」

と椅子に腰を下し、新聞をひろげながら言った。これには、わたし、恐縮した。酔ってつまらぬことを大声で喋りまくったのだから、さぞかしうるさかったろう。これは失礼しましたと詫びつつ恥入っていると、広津さんは徳田秋声という男は、と話しかけた。親子関係をみても、女や金の面をみても、乙をつけられるところはないね。どの面をみても、丙しかつけられない男だったが、しかしそういうところを全部ひっくるめた徳田秋声とい

うのは、甲上の人物だったね。

昨夜のわたしらの作家評などは、その個々の面の一つか二つの欠点をあげつらい、誰某は傍観的でくだらぬなどときめつけるような、他愛ないものだったのであるから、広津さんはよほどあきれたわけだろう。まさに穴でもあれば入りたい心地がしたが、わたし、そのひとことに、はなはだ啓発されたものである。

その啓発は、ものを客観的に見るということに関したもので、一つや二つの特徴でたちまち対象を決定するような、たわいなさについての反省でもあった。たとえば若い頃は、顔立ちがよいとか、声がきれいだとか、動作が愛くるしいという程度の、二つ三つの特徴だけで人を愛せたり、愛してはばからないものだが、年と共にその程度の採点では満足出来なくなり、多くの面での採点が必要になってくる。若い頃は部分を全体と見誤りがちだが、年と共に全体が見えだし、採点の項目がふえてくるのである。

たとえば若者たちは、わずか一つか二つの欠点や好き嫌いで、やつは気に入らないから友としないという評価を、簡単にしがちである。そういう評価を簡単になし得るのは、一つには理想的な状況をむやみに望むからであり、そのこと自体は発展のなまなましい衝動であるけれど、それなりに大切な行為ではあるけれども、しかしその簡単な評価が誤りであることに間違いはない。そういう誤りを繰返して、年と共に全体が見えはじめると、採点項目もふえて若い時のようにたわいなく人を愛したり出来なくなってくる。総合点がか